

## BOOK REVIEW 1

## SF 映画で学ぶインタフェースデザイン アイデアと想像力を鍛え上げるための 141 のレッスン

Nathan Shedroff & Christopher Noessel 著 安藤幸央 監訳  
丸善出版 ISBN978-4621088364 2014 年発行

評者：田村秀行（立命館大学）



### 【本書評の背景、基本スタンス】

編集委員から書評依頼されるまで、本書の存在を知らなかった。表題を見て、目を疑った。SF 映画に学べというのは、「未来創像学」を提唱し、自研究室の研究テーマ選びにも実践してきた評者の基本スタンスそのものではないか。余技で毎月、映画評論を書き、SF 映画通を任じている身としては、この書評は自分が書くべきだという想いで、一も二もなく、引き受けることにした。

ただし、原著者 2 名と評者では、少しだけスタンスが違う。良質の SF 映画には、近未来の情報機器やそのインタフェースに関するアイデアが詰まっています。そこから様々なインスピレーションが得られるという主張は全く同じだ。違うのは、彼らは UI/UX 分野のデザイナー出身であり、正に UI デザインの方法論としてこの考えを実践しているのに対し、評者は HI や VR 分野の新規研究テーマ発掘に役立てよと啓蒙していることである。

### 【対象となる映像作品】

原著の書名は“Make It So”で、『新スタートレック』シリーズのピカード船長の決まり文句である。そして原著の副題が、邦訳の表題である。この洒落っ気からも、著者らはかなりの SF マニアだと分かる。その彼らが本書で引用する映像作品は 123 本。大半は劇場用長編映画だが、短編作品、TV 番組、企業の PV も若干入っている。

この中で評者が観たのは 72 本だった。もっと多いかと思ったが、これは完敗だ。ただし、日本で未公開作品も少なくなく、彼らの思い入れのある作品が選ばれている。著名な SF 映画であっても、UI デザインとは無縁な映画（例えば、『猿の惑星』シリーズ）は入っていない。歴史的経過をたどったり、SF 映画の原点とされる『メトロポリス』（1927）に何度も言及するなど、SF 映画史への深い愛情が感じられる。とりわけ『スタートレック』全シリーズへの傾倒が顕著で、典型的な「トレッキアン」である。そのためか、少し古い時代の作品に偏っていると感じる。CG/VFX 技術が開花し、映像の表現力が飛躍的に向上した 20 世紀末や 21 世紀に入ってから製作された作品の比率を、もっと上げるべきだと思う。

### 【レッスン内容とその意義】

邦訳本の副題が、本書のエッセンスであり、正にその通りの内容だ。あまりのボリュームに、評者は全編を隅々まで精読する時間がなかった。2 人が若い頃から長

年かけて溜め込んだネタの集大成なのだろう。相当しっかりした分析力である。ただし、141 は少し多く、表現もくどい。もう少し簡潔な文体で、レッスン数も取捨選択して減らした方が把握しやすいと思う。

巻末に各章のレッスンは簡潔な文に要約されているのは好ましい。さらに「メタレッスン」と称して、類似した事項が再整理されている（ならば、全体をこの視点でのレッスンに再構成する手もあったと思う）。

話題にしている映画中のシーンを、膨大な数の画像として載せている。こうした場面写真の掲載許可を、各映画会社から得ていることは、大いに評価したい。ただし、既視感のある読者以外には、静止画だけでは分かりにくい。当該シーンの動画が見られる電子本で出版して欲しかったところだ。これは、著作権の関係で実現できなかったと明記されているので、仕方ないところだ。

### 【邦訳書とその欠点】

翻訳者 10 名も UI/UX 分野の関係者で、SF 好きの集団のようなのだ。その意味では最適で、訳文は決して読み易くはないが、最近の劣悪な邦訳が多い中では、我慢できる方だ。プロの翻訳家でないなら、こんなものだろう。

巻末に、映画名での索引があるのは嬉しい（原著にはない）。それならいっそ、本邦で DVD が発売されているかを調査して、一覧にして欲しかったところだ。

最大の欠点は、原著の画像は（モノクロ映画を除いて）すべてカラーであるのに、邦訳本では約 35% しかカラー印刷されていない。半分以上がモノクロではつらい。

文体が「ですます調」で締まりがないし、横書きに「、」を使うのも、監訳者や出版社の見識を疑う。取説や俗なマニュアル本ではないのだから、UI を論じる以前に、伝統ある書籍の基本スタイルを学べと叱責しておきたい。

### 【その後の観るべき映画】

苦言も呈したが、是非一読して欲しい力作だ。原著は 2012 年の刊で、『ミッション：インポッシブル／ゴースト・プロトコル』（2011）までを扱っている。その後公開された中で、観て欲しい SF 映画は 10 数本あるが、紙幅がないので『プロメテウス』（2012）『オブリビオン』（2013）『アイアンマン 3』（2013）『エリジウム』（2013）『インターステラー』（2014）の 5 本を挙げておく。内容や着眼すべき点は、評者のサイトを参考にされたい。

<http://www.rm.is.ritsumeai.ac.jp/~tamura/sfx/>